

二重直接目的語構文と普遍法則

村 上 丘

The Double Direct Object Constructions and Some Universal Laws

Takashi Murakami

0 序

英語には、下記のa文、b文にみられるように、ひとつの目的語をしたがえるとともに、c文、d文がしめすように、ふたつの目的語をしたがえる若干の動詞がある。

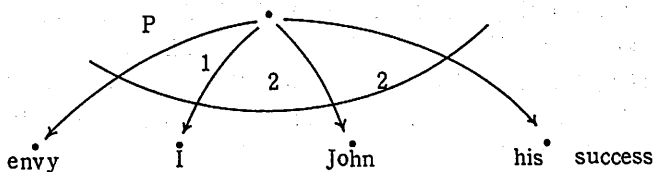
- (1) a. I envy John
b. I envy John's success.
c. I envy John his success.
d. I envy John the fact that he always catches the most fish.
- (2) a. He forgave her.
b. He forgave her offences.
c. He forgave her her offences.
d. He forgave her the wrongs she'd done him. (LCED)

この構文をゆるす動詞は、envy, forgive, pardon, grudge など極少数である。かりに、これらの動詞を envy 型動詞とよぼう。本稿の目的は、関係文法の枠組のなかで envy 型動詞のあらわれる構文を如何に記述するかを勘案することにある。第1節と第2節においては、この構文に対するこれまでの分析を提示し、その問題点を指摘する。第3節においては、上記c文のように、目的語直後の名詞句が所有者-所有物の関係にある構文をとる称賛動詞について考察する。第4節においては、上記d文のように、目的語直後の名詞句が複合名詞句である構文をとる判定動詞について考察する。第5節においては、envy型動詞と他の動詞群との類似点・相違点を指摘し、上記c文 d文が、ともに複写上昇規則を含有する旨の主張をする。第6節から第7節にかけては、複写上昇規則と受動規則との両方が適用した構文を如何に表示するか、という問題を検討する。第8節と第9節においては、規則の同時適用に関する一般言語学的考察をおこなう。

1 Jespersen (1927)の主張とその問題点

Jespersen (1927)¹⁾ は、envy型動詞が直接目的語をふたつとると主張する。その根拠は、①動詞の直後の名詞句を、前置詞toでマークして後置することができない、②ふたつの名詞句は、いずれも単独で存立することができる、という2点である。関係文法の用語でこれを換言すると、Jespersen は、envy型動詞が単一層(unilevel)の構造にあらわれると主張していることになる。とすれば、たとえば(1c)は(3)のような関係網として表示されよう。

(3)



ところで(3)の関係網は、普遍法則のひとつとしてすでに提案されている層内唯一性の法則に抵触する。

(4) 層内唯一性の法則 (Stratal Uniqueness Law)

任意の文法関係を Termx とすると、同一層内で Termx をもつ名詞句は、最大限ひとつしか存在しない。

したがって、もし(3)の関係網がただしとすると、自然言語をできるだけせまく制限しようとする普遍法則の一端が瓦解することになる。

しかしながら、(3)の分析に対する問題点がすくなくともふたつある。ひとつ。もし envy 型動詞のしたがえるふたつの目的語がともに直接目的語ならば、いずれも動詞の直後にくることができはすである。しかし、(5)がしめすように、一方は動詞の直後にくことはできない。

- (5) a. *I envy John's success him.
b. *He forgave her offences her.

このことは、ふたつの目的語が対等の資格で動詞に後続しているのではないことをしめしている。

ふたつ。(3)の関係網においてふたつの直接目的語はたがいに独立して2の孤線をひきいている。しかしこれらの目的語は相互に無関係ではない。Allerton (1982) ²⁾も指摘しているように、ふたつめの目的語は、意味的に、ひとつめの目的語の所有物であり、統語的には、その属格代用形式があらわれる。それは、(6)の文が単独では非文である事実によって端的にしめされよう。

- (6) a. Δ I envy John her success.
b. Δ He forgave her their offences.

すなわち(3)の関係網は、ふたつの目的語の統語的関連 (位置的非対等性・代用形式具現性) を適確に表示していない。したがって、それはただし構造ではないとかんがえられる。

2. Asada (1981)の主張とその問題点

Asada (1981) ³⁾は、前述の Jespersen の主張を踏襲して、envy型動詞がふたつの直接目的語をとるとみなしている。そして、(5)の非文法性は粗密の原則(7)によって説明されるとしている。⁴⁾

(7) 粗密の原則

談話のなかの同一指示語句は、「粗」から「密」へとながれる。

すなわち、(5a)は、「密」情報をふくむ名詞句 (John's success) が「粗」情報をふくむ名詞句 (him) に先行し(7)に違反するので非文である、とするのである。

しかしながら、原則(7)にはすくなくともふたつの問題があるとおもわれる。ひとつは、この原則のなかで言及されている同一指示語句 (coreferent) という概念についてである。この同一指示語句とは代名詞化をひきおこすような厳密なものではなく、たとえば(8)の him と on the head との関係さをすと Asada は付言している。

- (8) a. I hit him on the head.
b. *I hit on the head him. ⁵⁾

ところで、'hit NP1 on NP2' の NP1 と NP2 とのあいだには、譲渡不可能的所有関係 (inalienable possession) がなくてはならない。一方、envy NP1 NP2 の NP1 と NP2 とのあいだには、譲渡可能所有・譲渡不可能的所有ともども可能である。また(1d)におけるふたつの目的語 John and the fact that he always catches the most fish の関係にいたっては、所有の概念で規定することすらできない。したがって、このようなふたつの名詞句の漠とした関係 (それを同一指示語句とよぶこと自体にも問題があるとおもわれる) を、一般的に規定することは困難だとおもわれる。実際、Asada (1982) においても、同一指示語句を厳密に定義する作業は放擲されている。したがって、原則(7)は、その対象となる名詞句を予測する力 (predictability) に欠け、反証可能性 (falsifiability) がひくい。

第2の問題点は、原則(7)に対するあきらかな反例(9b)があることである。

- (9) a. They will forgive you your sins.
b. Your sins will be forgiven you. (OALD)

(9b)においては、(7)の制約に反して、同一文中で密情報(your sins)が粗情報(you)に先行しているが文法的である。この文を容認しない話し手もいるが、すくなくとも、原則(7)は(9b)を許容する話し手の直観をたゞしく説明することができない。((9b)に対応する関係網は、第6節および第7節で考察する。)したがって、envy型動詞がふたつの直接目的語をとるという立場に固執するかぎり、その分析の不備を如何様に補修しようとしても問題がのこるとおもわれる。

3. 称賛動詞と所有者の複写上昇

他者の行為や性向に対する称賛をあらわす一群の動詞を、称賛動詞(verbs of praising)とよぼう。これらの動詞は、①主語+動詞+目的語、②主語+動詞+目的語+for+名詞、というふたつの文型をとる。

- (10) a. They praised his bravery.
b. I applaud your decision.
c. She admired his courage.
(11) a. They praised him for his bravery.
b. I applaud you for your decision.
c. She admired him for his courage.

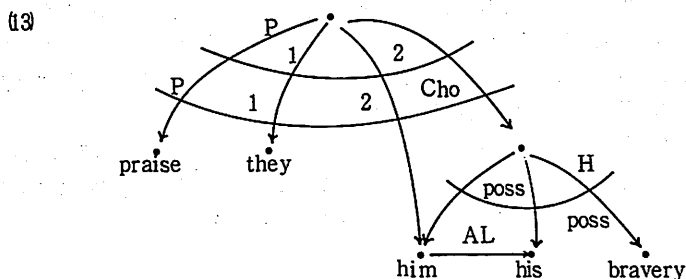
これらは等価な知的意味をもつとかんがえられるので、(10)の各文に対応する関係網は(11)の各文に対応するそれと始発層において同一であるとおもわれる。(11)においては、意味的に余剰的な(すなわち、直接目的語と同一指示的な)代名詞が前置詞句内にあらわれているが、(10)においてはそうではない。したがって、(10)の文の方が、始発構造をより忠実に反映しているとかんがえられる。すなわち、(10)は無標構文(unmarked construction)であり(11)はそれに何らかの操作がくわえられた有標構文(marked construction)であるということができよう。

ここで、英文法につきのような文法関係を変更する規則があるものとしよう。

(12) 複写上昇規則(Copy Ascension)⁶⁾

a が句b内にあり、b が節cの直接目的語であるとき、aはその代用形をのこしつつ、cの直接目的語になる。

(11)の文に対応する関係網は、この複写上昇規則を含有し、(10)の文に対応する関係網は含有しないと主張したい。すると、たとえば(10a)に対応する関係網はつぎのように表示されるとかんがえられる。



関係網(13)は、つぎのような事実をあらわしている。①praiseは、したがえる名詞句が始発層で主語と直接目的語の文法関係をなう2項述語である。②直接目的語の所有者(Possessor)であるhimは、文法関係継承の法則にしたがって主節に対し直接目的語の文法関係をもつ。③上昇名詞句と残留代用形とのあいだの照応関係は、照応リンク(Anaphoric Link)による連結によって表示される。上昇名詞句の出身地(host)は、最終的に前置詞forでマークされるが、これは次のような前置詞付与規則によるものとかんがえられる。

14 前置詞付与規則⁷⁾

複写上昇規則によってその上昇名詞句がくりあげられた出身地は, for でマークされる。

4. 判定動詞と複合名詞句内名詞句の複写上昇

この節では, Fillmore (1971)⁸⁾や McCawley (1979)⁹⁾によって判定動詞(verbs of judging, verbs of bitching)とよばれた動詞が複合名詞句と共に起した場合の統語構造を考察する。

下記の文からあきらかなことは, 前置詞句内の複合名詞句のなかには直接目的語と同一指示的な代名詞が具現していなくてはならない, ということである。

(15) a. McGovern criticized Nixon_i for the fact that he_i puts ketchup on his cottage cheese.

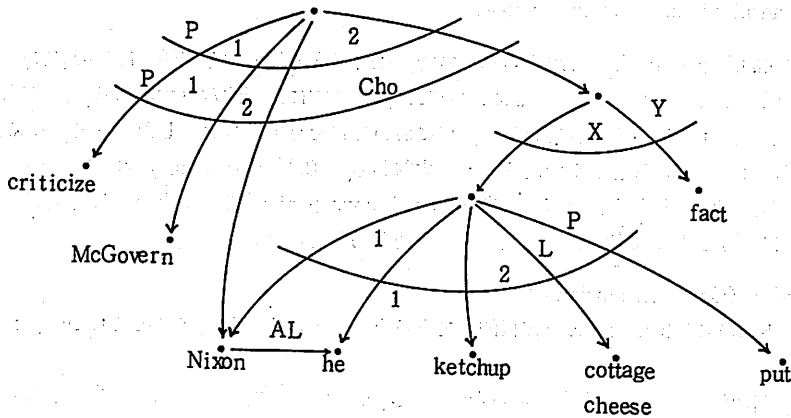
b. McGovern criticized Nixon_i for what he_i said to the Knights of Columbus.

(16) a. *McGovern criticized Nixon for that Mao is a yellow aryan.

b. *McGovern criticized Nixon for the proposition that Mao is a yellow aryan.

前節では, 複写上昇規則が所有者-主要部の内部構造をもつ直接目的語に適用する旨の主張をした。ここで, 複写上昇規則は複合名詞句の内部構造をもつ直接目的語に対しても適用すると主張したい。たとえば, (15a)に対応する関係網はつぎのように表示されると想定される。

17



17の関係網は, つぎのような事実をあらわしている。①criticize は, したがえる名詞句が始発層で主語と直接目的語の文法関係をなす2項述語である。②複合名詞句内の主語(Nixon)は, 文法関係継承の法則にしたがって主節に対し直接目的語の文法関係をもつ。③上昇名詞句と残留代用形とのあいだの照応関係は, 照応リンクによる連結が保証する。なお, 同格名詞句をあらわす文法関係(ここではX, Yで表示した)は現在の段階ではあきらかではないが, ここでの議論に本質的な影響をあたえるとはおもわれない。

関係網17は, 前置詞付与規則14の適用をうける。したがって, 判定動詞のしたがえる前置詞句の前置詞がなぜforなのか, を説明することができる。さらに, 複写上昇規則を設定することによって, 前置詞句内になぜ直接目的語と同一指示的な代名詞がのこらなくてはならないのか, を説明することができる。

5. 二重直接目的語構文

この節では, 二重直接目的語がふたつあらわれているといわれるenvy型動詞構文を考察する。

(18) a. I envy him his success.

b. I don't grudge him his success.

c. They forgave him his sins.

(19) a. He envies her the position she has achieved in her profession. (RHD)

- b. His cruel master grudged him even the food he ate. (OALD)
 c. He forgave her the wrongs she's done him. (LCED)

(18)の例文から, envy 型動詞と(第3節で考察した)称賛動詞との共通性は明白である。すなわち、意味的に余剰的な所有格代名詞をふたつめの目的語がふくむ構文をとにもゆるす, という点である。また(19)の例文からは, envy 型動詞と(第4節で考察した)判定動詞との類似性を抽出することができる。すなわち, ともに, 複合名詞句内に直接目的語と同一指示的な代名詞がなければならない, という点である。

すでに, 称賛動詞と判定動詞をふくむ構文は複写上昇規則の適用をうける旨の主張をしたが, さらに, envy 型動詞もまた複写上昇規則の適用を誘発すると主張したい。このことによって, envy 型動詞のしたがえるふたつの目的語間の統語的・意味的関連を的確に捕捉することができる。複写上昇規則を含有する構造においては, 前置詞付与規則4によって, 上昇名詞句の出身地を for でマークするのが通例である。ところで envy 型動詞が複写上昇規則をひきおこす他の動詞群とことなるのは, この前置詞付与規則4の適用をうけない点にある。この特性によって, envy 型動詞はあたかもふたつの直接目的語を同一層にもつような構造を呈するのである。

しかしながら, 前置詞付与規則4は絶対に envy 型動詞構文に適用しない, というわけではない。すなわち(20)がしめすように, ふたつめの目的語が所有者-主要部の構造であろうと, 複合名詞句の構造であろうと, その前に for が具現する場合もあるのである。

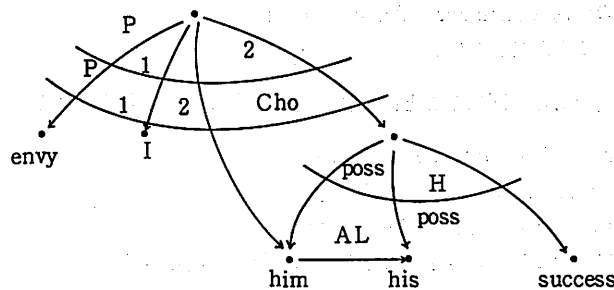
- (20) a. I envy her for her composure. (RHD)

- b. I'll never forgive you for what you said to me last night.

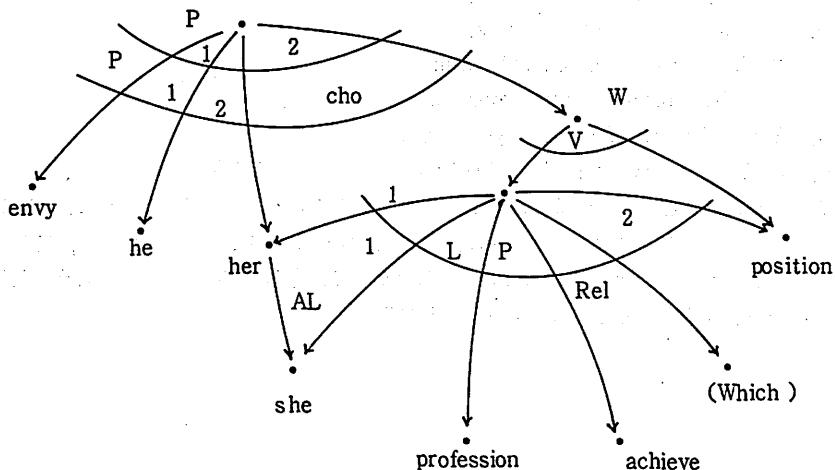
(20)は envy 型動詞が複写上昇規則を誘発するという分析が妥当であることを例証している。すなわち envy 型動詞構文にあらわれる前置詞が, (あらわれるとすれば)なぜ for であるか, を説明することができる。

したがって, たとえば(18a) (19a)に対応する関係網は, それぞれ(21) (22) のように表示することができるであろう。

(21)



(22)



(関係詞節およびその先行詞の文法関係は、かりにV, Wとして表示する。)上記の関係網は(関係網(3)とことなり)層内唯一性の法則に抵触することはない。すなわち、envy NP₁ NP₂ の構文は、その始発層においてNP₁は文法関係をになわず NP₂は直接目的語の文法関係をない、その最終層においてNP₁は直接目的語 NP₂は失業者の文法関係をもつ。したがってこの分析は、自然言語をできるだけせまく制限する文法を設定するという条件に合致している。さらにこの分析は、envy型動詞と(一見それと無関係にみえる)称賛動詞・判定動詞など他の動詞群との統語論的類似性を明確に呈示する。したがって、envy型動詞のみを例外的に処理する必然性は消滅する。

6. 複写上昇規則と受動規則(1)

複写上昇規則とは、直接目的語の文法関係をもつ名詞句内の特定の名詞句を、その代用形をのこしつつ上昇させる機能をもつ。もしこの定式化がただしければ、複写上昇規則による上昇名詞句は直接目的語の文法関係をもつゆえに、受動規則の入力となることが予測される。なぜなら、受動規則とは直接目的語の文法関係をもつ名詞句を主語に昇格させる機能をもつからである。

下記の文がしめすように、称賛動詞構文における上昇名詞句は、予測されるとおり、受動規則の適用をうけることができる。

- (23) a. They praised him for his courage.
- b. He was praised for his courage.
- c. *His courage was praised him (for).

前置詞 for でマークされた出身地は、失業者の法則によって、上昇名詞句(直接目的語)と同一の文法関係をもつことはできず失業者の文法関係をもつ。この失業者は、失業者昇格禁止の原則によって、もはや昇格することはゆるされない。

- (24) 失業者昇格禁止の原則 (Chomeur Advancement Ban)
- 失業者は昇格することができない。

したがって、(23 c)が非文である。同様のことは、判定動詞構文においても該当する。

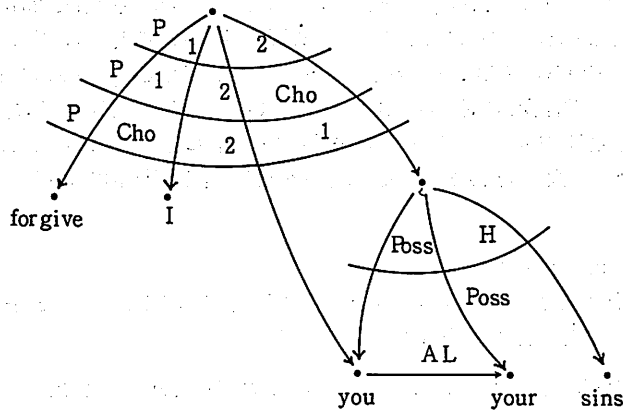
- (25) a. They blamed her for her failure.
- b. She was blamed for her failure.
- c. *Her failure was blamed her (for).

ところが、envy型動詞においては、いささかことなった現象が観察される。

- (26) a. I envy him his success.
- b. He is envied his success.
- c. # His succes is envied him.
- (27) a. I will forgive you your sins.
- b. You will be forgiven your sins.
- c. # Your sins will be forgiven you. (OALD)

#でマークしたc文の許容性については方言差がある。すでに第2節で指摘したように、粗密の原則(7)は、すくなくとも(26-27)のc文を許容する話し手の直観を説明することができない。しかし、失業者昇格禁止の原則(24)によって、(23 c) (25c)は排除されている。したがって、もし(27c)が(28)のような関係網に対応するならば、それは失業者昇格禁止の原則に対する反例となる。

(28)

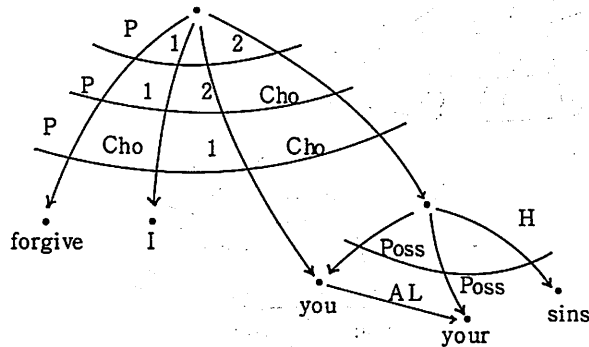


関係網28はとりもおさず受動規則自身の再定式化をも要求する。なぜなら、28においては2が2を経由して1に昇格しているからである。このように文法の各部門に多大な犠牲をしいる28は、適格な関係網とはかんがえられない。ここにおいて、複写上昇規則と受動規則とをどのように適格な関係網のなかにくみいれて(26c)(27c)の文法性を保証するか、という問題を解決しなくてはならない。

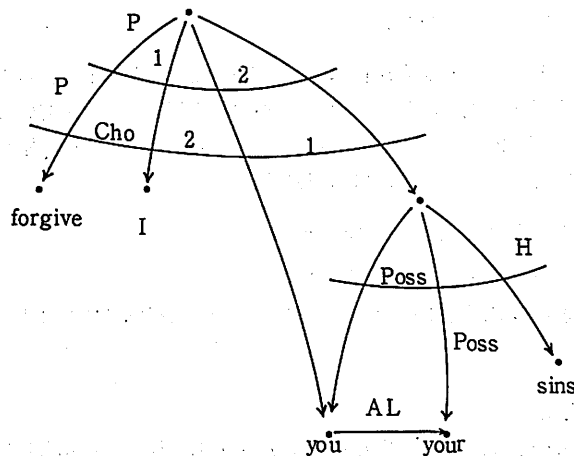
7. 複写上昇規則と受動規則(2)

この節では、(27b)(27c)に対応する関係網が(29)(30)として表示される趣旨の提案をおこなう。

(29)



(30)



(29)の関係網は問題がないとおもわれる。それは、第6節で考察した称賛動詞の受動構文(23b)、判定動詞の受動構文(25b)などに対応する関係網と同一の構造である。(30)の関係網においては、第2層において受動規則と複写上昇規則とが同時に適用している。(文法関係変更規則の同時適用に関しては、第8節でふれる。)この関係網は、層内唯一性の法則、文法関係継承の法則のいずれも順守している。また、(28)のように受動規則の定式化に変更を余義なくさせる事態も生じない。さらに、(30)は失業者昇格禁止の原則(24)にも抵触しない。

しかしながら、(30)にはひとつ重大な難点がある。それは、(30)が失業者の法則(31)に抵触する、ということである。

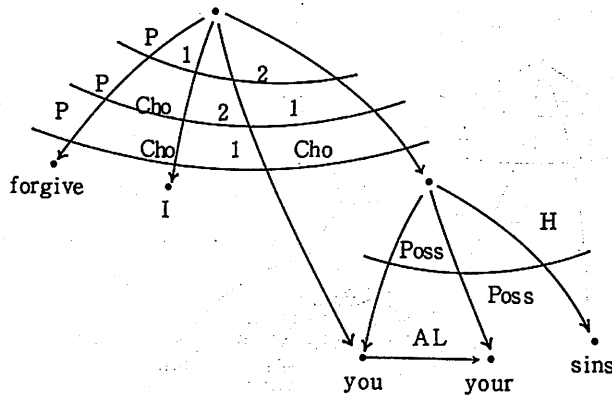
(31) 失業者の法則 (Chomeur Law)

名詞句 a が C_i 層で文法項関係をもち、かつ、 a とは異なる名詞句 b が C_{i+1} 層で同一の文法項関係をもつならば、 a は C_{i+1} 層で失業者関係をもつ。

法則(31)にしたがえば、上昇名詞句の出身地は2ではなくてはならないが、(30)では1である。この問題は、ふたつの規則が同時に関与したときにかぎり、失業者の法則をやぶってもよい、とすることによって解決できるかもしれない。この点に関しては、第8節で検討する。

関係網(30)を直接支持する統語的証拠は残念ながら現在のところないのであるが、間接的な証拠は(それが普遍法則に違背しないことにくわえて)つぎのような事実が提供するかもしれない。(30)の関係網の最終層において、*you*は直接目的語、*your sins*は主語の文法関係をになっている。このことは、最終層が受動規則の入力となりうる情報を含有していることをしめしている。その場合の関係網は(32)であり、これに対応する文は(33)のような非文である。

(32)



(33) * You are forgiven by your sins.

(33)のような文の非文法性を説明するのに、その場かぎりの(ad hoc)でだてが必要であるというむきがあるかもしれないが、そうではない。関係網(32)は、実は、2種類の1への昇格規則をふくんでいる。すなわち、*your sins*は始発層直接目的語から第2層主語へ、*you*は第2層直接目的語から第3層主語へ昇格している。同一文中どこのようなふたとりの1への昇格は、あきらかに法則(34)に違反する。

(34) 1への昇格独占の法則 (1-Advancement Exclusive Law)

1への昇格は、単一節内で最大限1回しかありえない。

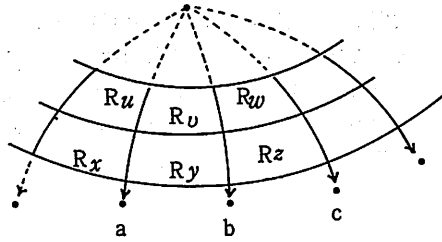
したがって(32)は、何らその場かぎりのでだてに依拠することなく、独自の根拠で(33)の非文法性の説明をすることを可能にする。

8. 文法関係変更規則の同時適用

名詞句 a, b, c が D_i 層において任意の文法関係 R_u, R_v, R_w をもち、 D_{i+1} 層において R_s, R_t, R_u

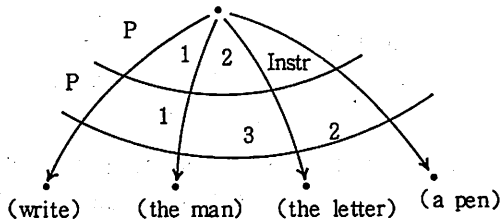
をもつような関係網(35)を想定してみよう。ただし、 $R_u \approx R_y$, $R_w \approx R_z$ とする。

(35)



R_w と R_y が等価な文法項, R_z が Cho を表示する場合は, 失業者の法則によって生ずる構造である。Di+1 において失業者を生じることのない関係網は, たとえば Perlmutter & Postal (1982a)¹⁰⁾ によって提案されている。かれらは, キンヤワング語における道具格昇格規則を含有する構文が(36)のように表示される, と主張する。

(36)



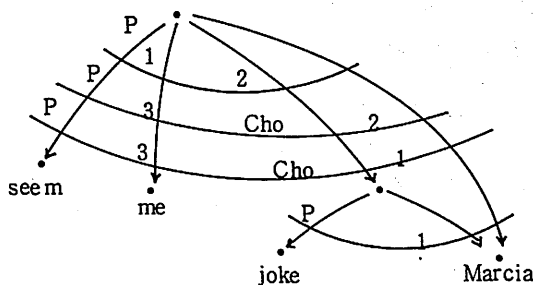
(36)は失業者の法則(31)に抵触しているか, P & P は, キンヤワング語のみならずボコマム語, ジルバル語においても同様に分析される構文があるとして, 失業者の法則が人間の言語構造を規定する妥当な原則ではない, とみなしている。

規則の同時適用の理論的可能性は, 上記のような2種類の再評価規則のくみあわせにかぎるわけではない。すなわち, 一方が再評価規則, もう一方が上昇規則のくみあわせも可能である。上昇規則とは節もしくは句のなかのある特定の名詞句を, 主節に対して(通例)直接目的語の文法関係をもたせる機能をもつ。かりに, 上昇名詞句が2をになう層において, 文法関係を変更する別な規則Qが関与するとしよう。Qは文法項をつくりだす再評価規則だとすると, 層内唯一性の法則に抵触する構造はゆるされないから, Qの理論的可能性は1をつくりだす規則か3をつくりだす規則に制限される。英文法においてゆるされる代表的な3をつくりだす規則は転到規則($1 \rightarrow 3$)であり, 1をつくりだす規則は受動規則($2 \rightarrow 1$)である。

前者のくみあわせ, すなわち, 上昇規則と転到規則(Inversion)の同時適用をふくむ関係網は, すでに Perlmutter & Postal (1982 b)¹¹⁾ によって提案されている。すなわち, かれらは(37)に対応する関係網として(38)を設定する。

(37) Marcia seems to me to be joking.

(38)



(38)においては、主語上昇規則 (Subject Raising) と、1 から 3 への降格規則とが第 2 層において同時に関与している。

後者のくみあわせ、すなわち、上昇規則と受動規則の同時適用をふくむ関係網が、第 7 節で考察した envy 型動詞の受動構文に対応するものである。したがってそこで提案された関係網(30)は、理論的に決して唐突なものではなく、規則同士の可能なくみあわせのひとつを反映したものにすぎない。また、(30)は失業者の法則に抵触するが、すでにのべたように、この法則自体が普遍的妥当性をもたないという独自の論考がなされている。したがって(30)は、可能な人間言語の構造をあらわす関係網ということができよう。¹²⁾

9. 同時再評価原則

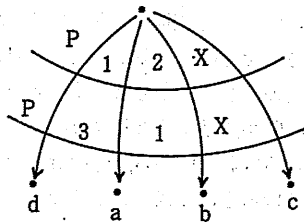
これまでに観察した文法関係変更規則の同時適用をふくむみつつの関係網 (すなわち、(30)、(36)、(38)) を比較すると、いくつかの共通項がうかがいあがる。ひとつは、いずれもその始発層が、主語と直接目的語の文法関係を有する対格構造 (transitive) である、という点である。ふたつめは、同時適用の際文法関係の変化はまったく無軌道であるわけではなく、第 2 層においてかならず直接目的語の文法関係が顕現する、という点である。かぎられた資料と分析にもとづいてはいるが、これらの共通項を把握するために、つぎのような原則を設定してみよう。(便宜上、関係網(35)を利用する。)

(39) 同時再評価原則 (Simultaneous Revaluation Principle)

もし $R_u = 1$, $R_v = 2$ であり、 $R_u \ni R_y$, $R_v \ni R_y$, $R_w \ni R_z$ のうちいずれかふたつがみたされたとすると、 R_x , R_y , R_z のうちひとつは 2 である。(ただし $R_w = \emptyset$ でもよい。)

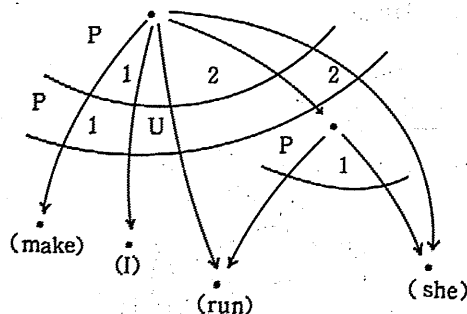
上昇規則の出身地は直接目的語にかぎる (Perlmutter : 1978 春学期講義) とすると、上昇規則をふくむ構文は文法関係継承の法則によりかならず原則(39)をみたす。したがって、同時適用されるふたつの規則のうち一方が上昇規則である場合には、原則(39)の適用は空 (vacuous) である。しかしながらこの原則は、同時適用されるふたつの規則がともに再評価規則である場合に、他の法則からは予測できない制限を関係網に課する。すなわち原則(39)は、たとえば受動規則と転倒規則の同時適用をふくむ関係網(40)が、適格な構造でないことを予測する。¹³⁾

(40)



原則(39)が妥当なものであるか否かの判別は、今後の実証的な研究にゆだねなければならないが、つぎのような分析がその証左となるかもしれない。すなわち、Aissen & Perlmutter (1982) ¹⁴⁾ は、スペイン語の使役構文に対応する関係網(41)を提案する。

(41)



節結合 (Clause Union) の際に補文の1が何故主文の2としてあらわれるのか、という理由を、原則(39)は説明することができる。¹⁵⁾

10 結 論

本稿では、まず称賛動詞・判定動詞をふくむ構文の統語文析をおこなった。envy 型動詞とこれら2種類の動詞との共通点・相違点を明瞭にし、それらの動詞がいずれも複写上昇規則の適用をうける旨の主張をした。envy 型動詞の特性は、(その構文が層内唯一性の法則に抵触するなどという) 普遍的構造上の特異性にあるのではなく、(前置詞付与規則が適用されない場合があるという) 言語個有の規則上の例外性にある、という結論をみちびいた。最後に規則の同時適用に関する考察をおこない、envy 型動詞が複写上昇規則と受動規則の同時適用をふくむ関係網にあらわれうる旨の主張をした。

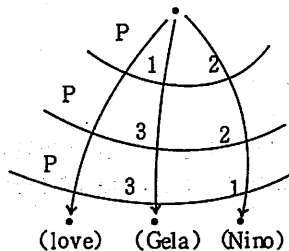
注

[10節からなる本稿の構成のうち前半の5節は、第22回 I C U 夏季言語学会(1983)における口頭発表の内容の一部に手をくわえたものである。議論をすすめるにあたり有益な助言と提言をよせてくださった河野武氏(大妻女子大学) 高橋邦年氏(信州大学)に感謝したい。]

- 1) O. Jespersen (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, I. George Allen & Unwin.
- 2) D. J. Allerton (1982) *Valency and the English Verb*. Academic Press.
- 3) H. Asada (1982) "Movement and word order of two constituents of the same formal type," *KLS*, 3, 31-39.
- 4) (6)のような文の処理について、浅田(1981)『envyの語法』英語教育 Vol. XXIX, No. 12は、B. Joseph (1976) "Envy: a functional analysis," *LI*, 7, 505-508で提案されたつぎのような原則を援用している。曰、「envy NP₁ NP₂において、NP₂はNP₁よりの視点からの記述でなければならない。」しかし、この原則は文法のなかで不要であるとおもわれる。T. Murakami (to appear) "Does ENVY violate the stratal uniqueness law?" *DAL* 参照。
- 5) (8b)のような文を単一関係網関係文法の枠組のなかで如何に排除するか、という問題に関しては、T. Murakami (1983) "The unaccusative hypothesis and Possessor Ascension," *DAL*, XV I, 131-139. を参照されたい。
- 6) この定式化における句bの内部構造は、(10-11)から観察されるように所有者-所有物の関係にある場合と、のちほどみるように複合名詞句の場合とがある。前者の場合、所有者と所有物とのあいだには、譲渡可能・不可能いずれの関係もありうる。この点において複写上昇規則は、所有者が譲渡不可能的に所有物を所有する構造にのみ適用する所有者上昇規則 (Possessor Ascension 注4参照) とことなる。
- 7) 厳密に言えば、この段階で「前置詞」という用語をつかうのは正確ではない。なぜなら、言語要素の配列順序は独自の語順規則によって決定されるからである。しかしここの議論に支障はないので、本稿では今後も「前置詞」という用語をつかうことにする。
- 8) C. J. Fillmore (1971) "Verbs of judging: an exercise in semantic description," In C. J. Fillmore & D. T. Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*, Holt, Rinehart & Winston, Inc. 273-296.
- 9) J. D. McCawley (1979) *Adverbs, Vowels and Other Objects of Wonder*. The University of Chicago Press.
- 10) D. M. Perlmutter & P. M. Postal (1982a) "Some proposed laws of basic clause

structure, In D. M. Perlmutter (ed.) *Studies in Relational Grammar* 1. The University of Chicago Press, 81-128.

- 11) D. M. Perlmutter & P. M. Postal (1982b) "The relational succession law," In D. M. Perlmutter (ed.) 30-80.
- 12) 実は同時適用の理論的可能性にはもうひとつある。それはふたつの規則がともに上昇規則である場合である。この点に関しては、村上丘(1982)「関係文法における対称的述語の処理について」『みゆうず9号』61-74を参照されたい。
- 13) 同時適用でない受動規則と転到規則の適用をふくむ関係網は可能な人間言語の構造である。たとえば A. C. Harris (1981) *Georgian Syntax*, Cambridge University Press. においては、つぎのような関係網が提案されている。



- 14) J. L. Aissen & D. M. Perlmutter (1983) "Clause reduction in Spanish," In D. M. Perlmutter (ed.) 360-403.
- 15) ただしこれは、補文が自動(intransitive)構文のときのみあてはまる。補文が他動(transitive)のときには、補文の1が主文の3としてあらわれるので、それは原則(39)から予測できない。